



TITLE:

「カラム」が切り取った世界II: 1950年代中葉における東南アジア ・ムスリムの世界観の変化

AUTHOR(S):

坪井, 祐司

CITATION:

坪井, 祐司. 「カラム」が切り取った世界II: 1950年代中葉における東南アジア・ムスリムの世界観の変化. CIAS discussion paper No.53: 「カラム」の時代 VI.--近代マレー・ムスリムの日常生活2 2015, 53: 17-27

ISSUE DATE:

2015-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/228634>

RIGHT:

© Center for Integrated Area Studies (CIAS), Kyoto University

『カラム』が切り取った世界Ⅱ

1950年代中葉における東南アジア・ムスリムの世界観の変化

坪井 祐司

はじめに

本稿では、1953～56年を中心とする1950年代中葉に『カラム』誌が掲載した写真およびそれに関連する記事に焦点をあて、当該時期におけるマレー・ムスリム知識人の世界観を明らかにすることを試みる。

筆者は、前稿にて1950年の創刊から52年までの時期について同様の作業を行った。その結果、『カラム』誌が掲載した写真は世界中を網羅しており、それらの写真および記事は同誌の思想のさまざまな側面を代表していることを指摘した。同誌は東南アジア、南アジア、中東のイスラム世界の諸地域の動向を万遍なく取りあげただけではなく、朝鮮やベトナムの戦争やアメリカの動向など冷戦下の世界を映したニュース写真を多数掲載した。くわえて、多様な階層の女性の写真の存在は、大衆誌としての性格も示していた[坪井 2014]。ただし、前稿は時期を限定した論考であり、同誌の時系列の変化という点からも考察を行う必要がある。

一方、筆者は別稿にて、マラヤの政治に関する『カラム』の論調の時代的変遷を取り上げている。そこでは、創刊当初の1950年代初頭、同誌は国境を越えたイスラムの連帯を訴える論説が中心であったが、その後民族主義的な論調が現れ、両者が併存していく状況を明らかにした[坪井 2010]。写真にみられる『カラム』誌の国際情勢の報道姿勢は、この変化とどのように連関するのであろうか。本稿では、1953～56年の時期を中心に『カラム』の世界観を明らかにするとともに、それを50年代初頭からの連続性と変化という点からも考察を行いたい。

以下、第1節において写真記事の量的な分析を行い、第2節以下で地域ごとに『カラム』の視点および関連記事の内容について紹介したい。

1. 1950年代中葉における写真記事

『カラム』では、通常各号に写真のページが4ページ設けられていた。そこでは、世界各地の時事的なニュース写真が紹介され、解説がつけられている。1953～56年の第30号から77号までの写真のコーナーにおいては、以下のような地域の写真が掲載された。

表1 地域別の『カラム』写真記事の件数(1953～56年)¹⁾

インドネシア	39	イギリス	2
マラヤ	36	インド	2
シンガポール	19	パキスタン	2
エジプト	5	ブルネイ	2
サウジアラビア	5		

出典：CIAS『カラム』データベース(<http://majalahqalam.kyoto.jp/>)

ここからいえることは、発行地であるシンガポールをはじめ、隣国のマラヤ、インドネシア、ブルネイなどイスラム圏東南アジアが関心の主たる対象であるという点である。筆者は前稿にて1950～52年の時期について同様の作業を行ったが、その結果は最も多かったのがインドネシア、次いでパキスタン、エジプトの順であった。それ以前と比べて、近隣地域の報道の比重が高まっているといえる。この時期のインドネシア、マラヤは、総選挙が行われるなど、政治史上の重要な転機を迎えていた。『カラム』誌においても地元の政治情勢への関心の高さがうかがえる。

東南アジア諸国に続くのは、中東(エジプト、サウジアラビアなど)、南アジア(パキスタン)といったイスラム世界の国々である。ただし、相対的にみてこれらの地域への関心は1950年代初頭ほどに高いとはいえない。エジプトのスエズ運河をめぐる国際関係や、サウジアラビアやイランにおける石油問題などがとりあげられているが、パキスタンなどについてはこの時期には散発的に取り上げられるのみとなった。

1) 写真の撮影地(被写体ではない)ごとに分類したもの。このほかに1ページのみの地域が7か所(アルジェリア、イラク、イラン、タイ、トルコ、中国、南アフリカ)ある。

それ以外の地域に関しては、50年代初頭は朝鮮戦争に関心が集まったのに比べて、明らかに注目された事象はみられない。ただし、写真ページでは取り上げられなかったとしても、記事のなかに関連する写真が掲載されていることも多い。そのなかで、非イスラム世界で最も頻繁に取り上げられたのはアメリカであった。東南アジアとは全く異なる景観の写真が掲載され、東南アジアのムスリムからみた同時代の社会が描かれたのであった。

以下、第2節では東南アジア(マラヤ、インドネシア)、第3節では中東のイスラム世界、第4節ではアメリカおよびその他の地域について、それぞれどのような写真が掲載され、解説がなされたかを検討したい。

2. 東南アジア——選挙とイスラム勢力の動向

本節では、マラヤ、インドネシアを中心とした東南アジアのイスラム圏における写真報道を通じて同誌のスタンスを明らかにする。前節で述べたように、この時期の『カラム』では、マラヤ、インドネシアに関する報道・写真の比率が大幅に高まった。1955年にはマラヤ、インドネシアで総選挙が行われた。この総選挙は、両地域のその後の政治体制の帰趨を決定する重要な分岐点であった。

『カラム』は、この両地域の選挙には大いに関心を示した。ただし、二つの選挙結果は同誌が期待したものではなかったと思われる。イギリス自治領下のマラヤでは55年7月に連邦議会の総選挙が行われ、連盟党が52議席中51議席を占め、大勝した。連盟党は、マレー人(UMNO)、華人(MCA)、インド人(MIC)の各民族を代表する政党が連合した組織であり、マラヤは多民族国家として独立の道程を確保した。一方で、同年9月にインドネシアで行われた総選挙においては、国民党(57議席)、マシュミ(Masyumi、57議席)、ナフダトゥル・ウラマ(Nahdatul Ulama、45議席)、共産党(39議席)らが議席を分け合い、議会に絶対的な多数派が形成されないままスカルノの独裁体制への道が開かれていった。イスラム勢力は、いずれも十分な代表権を確保できなかったのである。

マラヤにおける政治ニュースは『カラム』において逐一報道されたが、総選挙における連盟党の大勝については、大々的に報じられたとはいえない。『カラム』はUMNOが宗教を軽視していると非難しており、同党の他民族の政党との連携についても批判的で

あった。1953年にはUMNOの抗議によって『カラム』が燃やされるという事件が起こっている[Talib 2002: 10]。同党と『カラム』とは、対立関係にあったのである。それでも、1955年9月の第62号では、写真記事と社説で総選挙が取りあげられた。写真には、「UMNO-MCA-MICによる連盟党の勝利を受け、UMNOがクアラルンプルに本部を開く」と題して、スランゴル州スルタンの出席のもとでクアラルンプルに本部が設置される様子や、「連盟党の勝利における女性の力(Tenaga Wanita dalam Kejayaan Perikatan)」として、唯一の女性候補者となったハリマートン女史(Cik Halimahton)の演説などがみられる(資料3-1)[Qalam 1955: 19-21]。

同号の社説「連盟党の勝利(Kejayaan Perikatan)」では、連盟党が52議席中51議席を獲得した事実を伝え、同党がマラヤ連邦を統治するための十分な信任を得たとしながらも、「注意すべきは、連盟党の勝利の後、ペラの華人がすぐに中国とインドの言語を英語・マレー語にくわえて公用語とすべきと主張した」こと、市民権の要件の緩和も要求したことであると指摘した。このことは、マレー人の組織としてマレー人のために働くことを任じ、マレー人の利益に関心を集中させるというUMNOにとって試金石となると主張した。連盟党内で外来民族との間で利害が対立したと

TENAGA WANITA DALAM KEJAYAAN PERIKATAN

Tenaga ibu dalam menjayakan pilihan raya Perikatan adalah besar- perhatian mereka sangat luas. Dan di dalam kejayaan yang cemerlang hanya seorang sahaja daripada mereka yang dicalonkan iaitu Cik Halimahton.

Gambar kanan: Cik Halimahton sedang berucap. Kiri: Kaum ibu bergembira dalam pembukaan rumah UMNO.



Gambar menunjukkan Cik Halimahton calon Perikatan sedang menerima tahniah-tahniah.

資料3-1



資料3-2

き、マレー人の利益を守れるのかが問われているというのである。外国資本の進出や、教育問題(華人が小学校で自らの言語を使うだけではなく、中学・高校、大学まで作ってしまった)のようにマレー人の利益が脅かされかねない問題に関して、UMNO(と連盟党)の成功はマレー人の権利を守れるかどうかにかかっている。そして、それは結果が証明するだろうと突き放した見方を示したのである[Qalam 1955.9: 34]。

その後、UMNO党首のアブドゥルラーマンはロンドンでイギリス政府との独立交渉に臨むことになった。1956年2月の第67号に掲載されたアブドゥルラーマンと連盟党の使節団のロンドン出発の写真では、以下のような説明がつけられた「首席大臣アブドゥルラーマンは、連盟党の使節団の団長として、自分たちの政府というマラヤの市民の夢を実現するため、イギリス政府との交渉のためロンドンに出発した。…彼は独立を叫ぶ民衆に囲まれていた。彼は誇りあふれる叫びを見て責任の重大さを感じたにちがいない。涙を流し、議論を成功させられるだろうかと考えた」(資料3-2)[Qalam 1956.2: 24-25]。

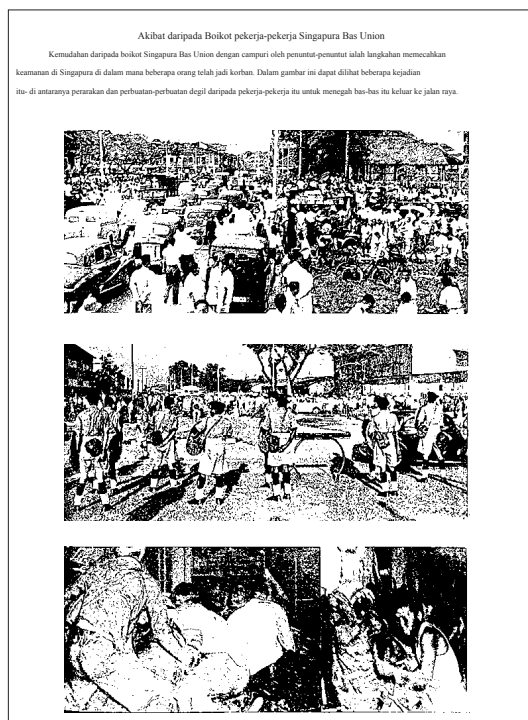
ただし、この号の写真ページの構成は、UMNOや連盟党に対する『カラム』の態度を示しているようで興味深い。ラーマンの写真の前後にUMNOに対抗する勢力も取り上げられているのである。先のラーマンのロンドンへの出発の説明には、「チンペン(Chin

Peng) との話し合いが決裂した後」という注記がついている。次ページには、1948年から武装闘争を繰り広げてきたマラヤ共産党のチンペンらと政府との会談(パリン会議、1955年12月)の写真も掲載された[Qalam 1956.2: 26]。また、前ページにはマレー人左派の流れをくむマラヤ人民党の結党大会(1955年11月)がとりあげられ、ブルハヌッディン・アルヘルミ(Burhanuddin Al-Helmy)とアフマド・ブスタマム(Ahmad Boestamam)が演説を行った写真が掲載されている[Qalam 1956.2: 23]。

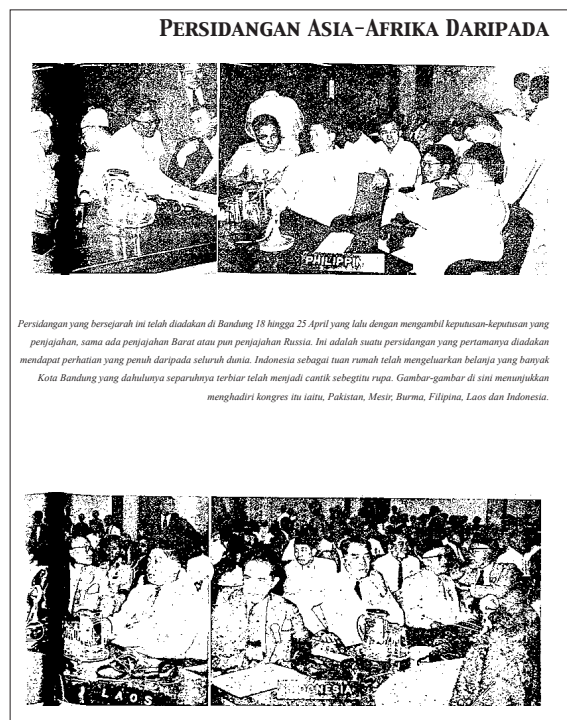
ほかにも、『カラム』はUMNO以外の政治組織も積極的に取り上げている。第58号(1955年5月)では、同年4月の「マラヤ青年会議の大会が大成功を収めた(Kongres Pemuda Melayu Diterima Kejayaan yang Besar)」として、全マラヤマレー人青年会議のクアラルンプルでの写真を掲載した。そこでは、マレー語、マレー民族、マレー国家のために戦うこと、左派も右派もその目標の達成を目指すことなどが掲げられた。大会は「一部勢力は大会を貶めようとし、UMNOにはボイコットされたが、大会は大いなる関心を持って迎えられた」という。大会にはダト・オン(Dato Onn)も姿を見せ、マレー語とマレー国家を目指して戦うと認めたという[Qalam 1955.5: 20-21]。前述のマラヤ人民党とあわせて、『カラム』の立場はこちらに近かったと思われる。

ただし、イスラムを基盤とする『カラム』は共産主義勢力の活動には一貫して批判的であった。『カラム』のおひざ元のシンガポールにおいて大きくとりあげられたのは、バス組合のストライキであった。第59号(1955年6月)には、「バス組合のボイコットと学生の介入によりシンガポールの平和は破られ、数人が死亡した」として、職員がバスを取り囲んでいる写真が掲載された(資料3-3)[Qalam 1955.6: 44]。同号の社説では、騒動において共産党を支持する華語学校の学生が暴れたことをリークアンユーらの扇動によるものと非難し、イギリス当局の対策を手ぬるいと批判した[Qalam 1955.6: 1]。

インドネシアでも、1955年は二つの大きな政治的なイベントが注目された。4月にバンドンで行われたアジア・アフリカ会議と、9月に行われた総選挙である。第59号(1955年6月)には、アジア・アフリカ会議の写真が多数掲載されている。会議に関する写真記事のページでは、「西洋諸国によるものであれ、ロシアによるものであれ、植民地支配の撲滅を目指す」と決議



資料3-3



資料3-4

されたことが紹介された。インドネシアが主催国として多くの予算を拠出したことが強調されるとともに、パキスタン、エジプト、ビルマ、ラオス、インドネシアなど各国の代表団が掲載された(資料3-4)[Qalam 1955.6: 20-21]。マラヤは独立国ではなかったが、ブルハヌッディン・アルヘルミが代表としてバンドンを訪れた。これにはマレー人指導者からの批判も起こったものの、支持者たちが彼を迎えたという[Qalam 1955.7: 20-21]。

9月の総選挙に関しても高い関心が示された。しかし、総選挙の結果はイスラム勢力にとって期待したものとはならなかったためか、選挙そのものに関する写真はほとんどみられない。記事では、エドルスがインドネシア総選挙について第69号(1956年4月)で以下のように整理している。イスラム勢力は過半数を得ることに失敗したが、これは主要なイスラム政党の分裂のためであった。ナフダトル・ウラマとイスラム同盟党(Partai Sarikat Islam Indonesia)²⁾はマシュミとことあるごとに対立し、マシュミをイスラムの教えから逸脱していると非難した。このことが共産党に39議

2) 同党の前身であるイスラム商業同盟は、インドネシアにおけるイスラム運動の草分けであった。第63号(1955年10月)では、インドネシアにおけるイスラム運動50周年の祝賀の様子が掲載された。イスラム商業同盟は、1905年10月16日のキャイ・ハジ・サマンフディ(Kiyai Haji Samanhudi)により始められた。彼はまだ存命中で記憶は鮮明であり、まだメガネなしで読むことができたという[Qalam 1955.10: 26]。

席を得るといふ勝利をもたらしたのであった。このため、イスラム政党は過去の分裂を忘れて一致結束すべきであると結論付けられたのである[Qalam 1956.4: 35]。

インドネシアのイスラム勢力として、『カラム』が支持していたのはマシュミであった。党首ナッシル(Mohammad Natsir)の論説は、同誌に多数掲載されている。1955年12月の第65号ではマシュミの10周年記念式典の写真が掲載され、「この10年間は、マシュミがインドネシアにおけるイスラムの主権を追求するための聖戦として想起される」と論評された[Qalam 1955.12: 23]。翌月の66号では、「マシュミの10年(10 Tahun Masjumi)」というナッシルの文章が掲載され、10年間のマシュミの歩みを回顧するとともに、横暴な商売や独裁政治を廃止する、貧困を撲滅するなど様々な点で革命的な性質(tabiatnya satu revolusi)を持っていることを主張した。そして、個人、社会、国家においてイスラムの教えを実現していくことを訴えた[Qalam 1956.1: 10-13, 41]。

インドネシア大統領のスカルノは、この時期でもしばしば表紙や写真記事に取り上げられている。ただし、その評価は必ずしも英雄的指導者としてのものではなかった。第65号では、スカルノの結婚も批判の対象となった。表紙ではスカルノと第二夫人のハルティニとその子供の写真が掲載され、なかほどの写真記



資料3-5

事でもとりあげられた(資料3-5)。そこでは「スカルノとハルティニは多く人びとの反対にあっている! (Sukarno dan Hartini di hadapan Khalayak Ramai Dibantah!)」と題され、スカルノの第二の結婚は大きなニュースとなったものの、多くの女性が反対していると紹介された。女性たちは、ファーストレディは第一夫人のファトマワティしか認められないと感じているというのである。ファトマワティも結婚後スカルノの巡礼に同行しなかったという [Qalam 1955.12: 24-25]。

主筆エドルスはしばしばスカルノ大統領を批判した。総選挙後の第66号(1956年1月)において、エドルスはスカルノが西イリアンの帰属をめぐる対立したオランダの企業のボイコットに言及したことを例に、彼が首相や内閣の意向を無視した発言を繰り返しているとしてその独裁を批判した [Qalam 1956.1: 8]。さらに、エドルスはスカルノがイスラム国家を否定してパンチャシラ国家を目指していると批判した。1955年12月メダンにおける演説において、スカルノは「共産主義国家を望むのか、帝国主義国家を望むのか、インドのような国家を望むのか、あるいはイスラム国家を望むのか」と問い、そのすべてを否定して国民党の原則であるパンチャシラを強調した [Qalam 1956.1: 8-9, 39-42]。多様性のなかの統一をうたい、イスラム色の薄いパンチャシラの原則はイスラム勢力にとって

は批判の対象であった。

一方で、創刊当初みられていた、マラヤとインドネシアの政治的境界を越えたムスリムの政治的連帯を訴える記事や写真はあまりみられなくなった。そのなかで、とりあげられたのが両者をつなぐ存在であるマレー語、ジャウィであった。第34号(1953年5月)には、インドネシアにおけるジャウィ雑誌を集めた写真が掲載された。雑誌「闘争(Berjuang)」はイスラムにもとづき、共産党の宣伝に毒されないように説いているという。オランダによるジャウィからローマ字への切り替えのため、ジャウィの識字率はインドネシアでは高くないが、「この写真を見て、まだインドネシアではジャウィが好まれないと思うだろうか?」というのである。マシユミ党首のナシルは、総選挙において、村落地域ではジャウィが役に立つだろうと述べたという [Qalam 1953.5: 9]。

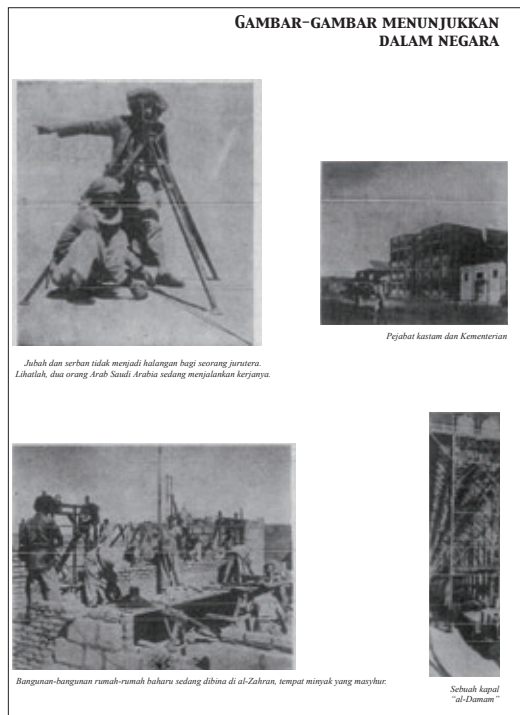
第75号(1956年10月)の写真記事では、「マラヤ・インドネシアのマレー語の統合は重要このうえない! (Penyatuan Bahasa Melayu Malaya Indonesia Terlalu Penting!!!)」として、マラヤマレー語連盟の第3回大会の様子が報じられた。この会議は、マラヤとインドネシアのすべての層のムスリムの衆目を集めたという。言語は民族精神の発展に重要であり、マレー語がマラヤの唯一国語となることが重要と考えられた。さらに、インドネシア政府との緊密な連携によりマラヤのマレー語との同化をはかることで、同じマレー語が東南アジアの全域にて使用されることになると指摘された [Qalam 1956.10: 24-25]。

3. イスラム世界——石油問題への関心

『カラム』は、中東を中心とするイスラム世界に高い関心を示し続けた。この時期の話題の中心となっただのは石油であり、石油がもたらす富がイスラム世界に何をもたらすかという点であった。

たとえば、第30号(1953年1月)では、国名は明らかではないが、砂漠における油田の写真が掲載され、「中東の不毛な平野は今や世界有数の石油生産地になっている。そこに富が出現し、その富から彼らの道徳(budi pekerti)の変化がもたらされるだろう」と指摘した [Qalam 1953.1: 46]。

産油国の現状も報告されている。第33号(1953年4月)では、写真記事にてサウジアラビアの近代化が紹介された。そこでは、「ローブ(Jubah)やターバンは技



資料3-6

術者にとって障害とはならない」として、働くムスリムが紹介されるとともに、ペルシャ湾のタンカーや石油ポンプ、首都リヤドの高いラジオ塔、近代的な政府庁舎、建設中の家屋の写真などが掲載された(資料3-6)[Qalam 1953.4: 24-25]。次のページでは、隣国の「イラクの発展と変化(Kemajuan dan Pembaharuan Iraq)」として、バグダードの電話局で働く女性、綿花工場が紹介された[Qalam 1953.4: 26]。

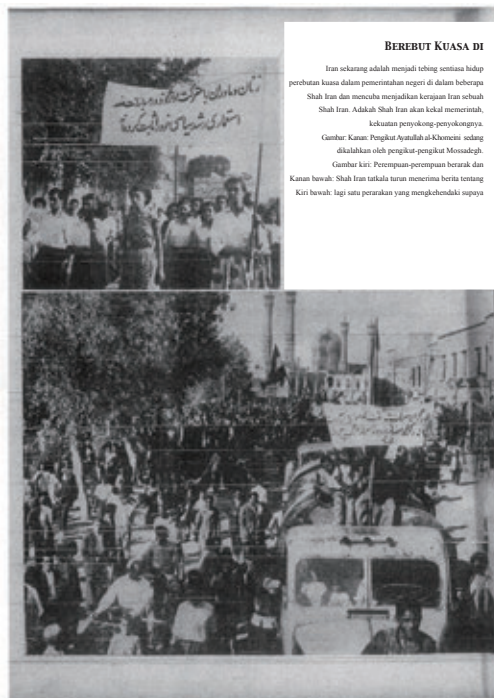
同号では、エドルスが「現在のメッカの開発と発展(Pembangunan dan Kemajuan Mekkah Sekarang)」という文章を書き、サウジアラビアの発展について、マラヤに25年間住んでいたというシャイフ・アブドゥルラーマン(Sheikh Abdul Rahman)という人物の報告を紹介している。記事によれば、国王アブドゥルアジズのもと、大規模な開発が進められている。この開発の財源に「巡礼税」が占める割合は10%以下であり、それだけではとてもこのような規模にはならなかったとされる。石油収入はメッカ、メディナ、ジェッダといった諸都市や交通を改善しているが、これは巡礼者にとっての利便性の向上ともなっている。病院が建てられたことは、巡礼時に問題となる交通事故への対応にもつながるためである。同時に、この地域の一番の問題となる水供給のため、パイプラインが建設されている。水は新しく整備されたジェッダ港に運ばれている。水は現在のジャカルタよりも豊富にあるとインド

ネシア人は述べているという。教育も充実しており、村に学校が建設され、豊富な奨学金により留学ができる。孤児にも教育が与えられる。サウジは資金が豊富なので、巡礼税は廃止すべきという声もあるが、ムスリムはヒジャーズ地域外からの税収により巡礼税以上の資金が投じられ、開発がなされていることを喜ぶべきであり、そのような意見は冷静に見守るべきであると述べられている[Qalam 1953.4: 15-18]。

イランも産油国として注目された。第12号(1951年7月)では、イラン政府によるアングロ・イラニアン石油会社の国有化問題が扱われた。イギリスが海軍を派遣し、パラシュート部隊を準備したとして、イランでは戦争の危機と受け止められている。イランは強硬姿勢で、もし戦争になれば第二の朝鮮となると懸念された[Qalam 1951.7: 19]。

この記事では、イランの石油の歴史が紐解かれている。イランの石油採掘は、1902年にイギリスが40年間のリースを受けたことで始まり、アバーダーン油田の開発のためアングロ・ペルシャ(のちにアングロ・イラニアン)石油会社が設立された。1914年に海軍大臣となったチャーチルは石油の重要性に目を付け、イギリス政府は会社に出資した。第二次大戦後、ソ連が北から進出してきたため、1948年にイラン政府は北部の油田の採掘許可をソ連に与えることを迫られた。そのなかで、アングロ・イラニアン会社の国有化問題は爆弾となった。サウジアラビアでは、最近アメリカの石油会社とサウジ政府が協定を結んで利益を分け合うことを決めたが、イランではイラン政府が権利を要求した。ただし、輸送手段も持つ欧米の大手石油会社は権力が強く、イラン政府も最終的には大企業との協定に従わざるを得ないだろうとみられている。イランを中心とする中東の石油は重要性を増しているため、アメリカなどが中東に関心を高めている。石油問題は経済問題のみならず政治問題でもあると指摘された。記事の最後では、イラン(3,180万トン)、サウジ(2700万トン)、クウェート(1720万トン)といった中東諸国およびアメリカ(2億7000万トン)、ベネズエラ(7800万トン)、ロシア(2700万トン)、インドネシア(700万トン)など世界各国の石油産出量がまとめられている。石油に対する『カラム』の関心の高さがうかがえる[Qalam 1951.7: 19-23]。

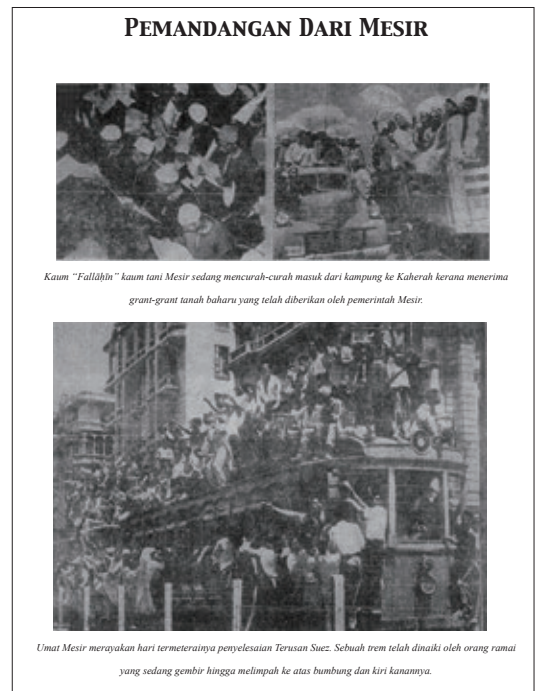
イランの政情は2年後転換する。第38号(1953年9月)では「イランの権力闘争」が扱われている。石油国有化政策を進めたイラン首相モサッデグはクーデタによ



資料3-7

り失脚し、皇帝パフラヴィが権力を握ったのである。写真は、モサッデグが国王を追放して共和制としようとしたが、王の支持者がモサッデグを追い出したと紹介されている。ほかには、モサッデグ支持者に排除されるホメイニ支持派、投票権を求める女性の行進、モサッデグ失脚の報を聞く国王、議会解散を求めるデモなどが紹介された(資料3-7)[Qalam 1953.9: 20-21]。エジプトでは、スエズ運河の国有化とそれに続く第二次中東戦争(スエズ動乱)が国際的関心を集めた。1952年のクーデタにより王政が廃止され、ナーセルが首相として権力を掌握していった。ナーセルは54年にイギリスとの条約によりイギリス軍をスエズ運河から撤退させることに成功する。第51号(1954年10月)では、「エジプトがスエズ運河の解放の日を祝う」として、多くのエジプト国民が街頭に集う写真が掲載された[Qalam 1954.10: 21]。翌月の第52号でも、政府からの補助金を受け取るために大挙として村からカイロに入ってきた農民の写真とともに、スエズ問題の解決を祝福するムスリムとして、人であふれるトラムの写真が掲載された(資料3-8)[Qalam 1954.11: 19]。

スエズ動乱は、1956年7月のナーセル大統領によるスエズ運河国有化により引き起こされた。第74号(1956年9月)では、「スエズ運河の出来事が全世界の注目を集める」として、ポートサイドのスエズ運河会社の事務所に緑に月星のエジプトの旗が翻った写真



資料3-8

が掲載された。スエズ運河会社のCSという青い旗は降ろされ、エジプト民衆はスエズ運河国有化宣言を受けて歓呼の声を上げたという[Qalam 1956.9: 24-25]。第77号(1956年12月)の社説では第二次中東戦争がとりあげられた。同年10月にイスラエルがエジプトを攻撃し、イギリス・フランスもスエズ運河の確保を目指して介入した。イギリス軍はポートサイドを占領したものの、イギリスの政策は中東諸国ばかりでなくアメリカや東南アジア諸国の反発もよんだ。アメリカ大統領アイゼンハワーはイギリスの行動が第三次世界大戦を招くと述べたという。国内の野党も政府の行動はイギリスの地位を落とすものとして批判した。大英帝国が衣替えしたコモンウェルスもこれにより傷つきかねないと論じられたのである[Qalam 1956.12: 1-2]。

4. アメリカとソ連・中国——冷戦と近代へのまなざし

非イスラム世界に対する『カラム』の関心も維持されていた。アメリカにくわえて、中国、ソ連といった共産主義諸国も取り上げられた。

中華人民共和国の状況はたびたび言及された。第72号(1956年7月)では、増ページ(tambahan)として、「ムスリム使節団が中国で歓迎される」という記事が掲載された[Qalam 1956.2: 1a-4a, 47-52]。インドネシアからのムスリムの代表団が中国を訪問した際の様子が



Kepada rombongan-rombongan Islam Indonesia dan Pakistan di negeri yang baik. Layanan yang memuaskan sehingga harus ada di antaranya keadaan negeri China itu – bacalah rencana yang ditulis Qalam keharuan ini. Gambar-gambar di atas dari kiri – jaman Urumqi. Di tengah jaman yang diadakan oleh Naib Yang Di-Pertua Tuan Haji Sirajuddin Abbas (yang bersongkok) dengan Sinkiang Saif al-Din 'Aziz di Urumqi. Gambar bawah kiri – kanan rombongan Indonesia keluar dari sembahyang hari raya. Gambar tengah kiri: rombongan Pakistan – kanan rombongan Islam Indonesia di keretapi – gambar-gambar khas bagi Qalam.



資料3-9

報じられたのである。彼らはシンガポールに寄港してエドルスの家で歓待され、インタビューを受けた。写真記事では、インドネシアとパキスタンの代表団が新疆のウルムチのウラマとともに撮った写真や、モスクにおける周恩来との写真などが掲載された(資料3-9) [Qalam 1956.7: 23-26]。

記事によれば、インドネシア代表団が調査した結果、北京のムスリム協会は1000万人であった。第二次世界大戦前のムスリム人口は3000~5000万人であったものの、蒋介石政府の弾圧により1000万人になってしまったのである。王朝、蒋介石時代は抑圧されたが共産党政権になって自由になったという言説もあるものの、記事はそれに懐疑を示す。広東のモスクは築100年超であるなど、共産党政権になってから建設されたモスクはない。アズハルに留学した指導者も老人であり、留学は共産党政権以前のことであった。イスラムやアラビア語を教えているところは見学できなかった。戦前のようなイスラム組織がまだあるのかは不明であり、国民党政権以前と比べて抑圧が強まったとはいえなくとも、弱くなったともいえないというのである。共産党政権下における集団主義も批判の対象となった。社会主義のもとで商業は抑圧されている。ムスリム個人が行うべき喜捨や巡礼ができなくなっているというのである。一方で、ウルムチには「自分は共産主義者ではなくムスリムである」という人も多

く、共産主義が宗教を消し去ることはできないとも論じられている [Qalam 1956.2: 1a-4a, 47-52]。

第61号(1955年8月)の記事「中国と東南アジア (Cina dan Asia Tenggara)」では、海外の華人について特集されている。著者はザハリ (Zahari, メダンの日刊紙ワルタ・ブリタ Warta Berita, 週刊誌ワクトゥ Waktuの編集者と紹介されている) であった。中国の統計によれば、海外在住の中国人はアジア、アメリカ、ヨーロッパに800万人にのぼる。インドネシアでは総人口の2.5%で200万、マラヤでは43%の250万人など、東南アジア各地のプラナカン(現地生まれ)を含む中国系人口が推計されている。ここで問題となるのは国籍についてである。中国国内の法律においては、各民族が平等な地位を認められていること、少数民族の地域では自治区が設定されていることなどが解説される。さらに、海外の華人の国籍問題について、現在では各国の国籍を取得しているケースが多いことが指摘される。台湾の中華民国国籍を選択することもできる。インドネシアの華人のなかで、インドネシア国籍と中国国籍を希望者はそれぞれ半々であり、強い者につこうとする傾向があるという [Qalam 1955.8: 23-29]。

社会主義大国のソ連についても、同じくインドネシア人による訪問記が掲載されている。第72号(1956年7月)のなかで、マシュミの指導者でもあるザイナルアビディン・アフマド (Zainal Abidin bin Ahmad) を団長とするインドネシア議会代表団がシンガポールで会見し、訪問したソ連の宗教に対する姿勢を語っている。彼は50メートルもの道幅がある道路があるなど、モスクワの発展ぶりを称賛したものの、共産主義には批判的であった。記事によれば、ソ連においては、国民は国家の道具となっている。これは、所有権が否定されているからにはほかならず、国民がどこでも移動させられる。信教の自由については、教会にもモスクにも自由はあると述べている。ただし、モスクはモスクワに1か所あるものの、ムスリム人口の1万人に対しては少ない。宗教学校はなく、共産主義の学校のみであり、モスクに政府からの援助は一切ない。共産主義が他国で繁栄するのかといえば、否である。他国では所有権と自由を所持している。ロシアで共産主義が受け入れられたのは、人々が皇帝や封建領主に押さえつけられて権利を持たなかったからである。ただし、フルシチョフのもとで所有権を与えられ始め、車を持てるようになりつつあるとも述べられている [Qalam 1956.7: 7-9, 41-42]。



資料3-10



資料3-11

他のヨーロッパ諸国への言及も見られる。ポーランドなど近隣の共産化された国々では、愛国心が完全に捨て去られてはいない(資料3-10: ポーランド北部のムスリム女性)。一方で、ドイツ、フランス、イタリアなど西欧の国々については民主主義の原則や宗教にもとづく協調精神の強固さに感銘を受けたという[Qalam 1956.7: 7-9, 41-42]。

最後に語られたのは男女平等についてであった。男女平等とは、老若男女ともに、「働かざる者食うべからず」ということであり、女性も男性同様に生活のために働くということである。その場合、結婚は男女が愛し合うことにほかならず、愛情がなくなれば別れてしまうということであると論じられた[Qalam 1956.7: 7-9, 41-42]。

一方で、資本主義陣営のアメリカに関する記事・写真も少なくない。前稿[坪井 2014]でも触れたが、『カラム』にはアフマド・フサイン(Ahmad Hussain)という人物がたびたびアメリカに関する記事・写真を寄稿している。彼は第15号(1951年10月)に「アメリカからの手紙(Surat dari Amerika)」として最初の記事を寄稿した。その後、第24号(1952年7月)から「遠くからアメリカを見る(Melihat Amerika dari jauh)」という題名となり、1954年4月の第45号まで計10編の記事が掲載された。第24号には、彼がヴォイス・オブ・アメリカ(Suara Amerika)に所属しており、記事が当局

とアメリカ国務省の公認のもと『カラム』に提供されたものであることが明記されている[Qalam 1952.7: 11]。

彼はニューヨーク在住であり、第15号の最初の記事では、102階建てのエンパイアステートビルや6,200人収容のコンサートホール、525の鉄道駅があることなど、ニューヨークの都市の威容が語られる。そして、ポーランド、スウェーデンなどヨーロッパ各国にくわえてアラブ人、インド人など、多様な民族的出自を持つ住民により社会が構成されていることが指摘される。さらに、ニューヨーク在住のマレー人、インドネシア人の有力者の経歴が記載されている[Qalam 1951.10: 16-18]。

続く5編の記事では、ニューヨークの名所や暮らしの様子が描かれる。第15号ではセントラルパークの休日の様子、第34号(1953年5月)ではエンパイアステートビルからの夜景の素晴らしさが描かれ、カフェテリア、ドラッグストア、ソーダスタンドといったアメリカの都市の大衆消費文化が説明されている(資料3-11: マンハッタン大通り)[Qalam 1953.5: 10-14]。第36号(1953年7月)ではコロンプス広場がとりあげられ、車、バス、ローラースケートをする子供たちなど、「コロンプス像を近代的生活が取り囲んでいる」さまが描かれる[Qalam 1953.7: 19-22]。第37号(1953年8月)では自然史博物館、メトロポリタン美術館といった文化

施設が紹介され〔Qalam 1953.8: 27-31〕、第38号(1953年9月)では国際連合本部が紹介された。そこでは、「国連に代表を送るという諸民族がとった誠実な方策が平和をもたらすことを望む」と述べられている〔Qalam 1953.9: 14-16〕。

第39号から45号に掲載された4編は、筆者が夏休みを利用して旅行に出かけた際の体験が綴られている。バスを利用して南部へ向かい、ボルティモア、ワシントン、アトランタ、ニューオーリンズで折り返してシカゴに至り、最後にナイアガラの滝を訪問している。道中では、ワシントンでのホワイトハウスやニューオーリンズの旧市街、シカゴの水族館、ナイアガラの滝などの観光名所を巡っている(資料3-12: ニューオーリンズの祝祭マルディ・グラ)。

それとともに、社会的な話題も盛り込まれた。南部における人種差別の存在に触れて、リッチモンドからアトランタに向かうバスが白人と黒人の座席が分かれており、黒人は後ろに座っていたことを記述している。それとともに、バス旅行中に知り合った人びとの会話も特徴的である。ボルティモアで知り合った黒人女性は社会主義者と目された。彼女は30年前に中東・近東を訪れた経験あり、最近学位をえて留学の奨学金を得たと聞いて著者は驚いたという。彼女はシンガポールにも居住経験があり、多民族の女性たち鮮やかな衣服に感銘を受けたと話した〔Qalam 1953.10: 29-32〕。アトランタへのバスでは年配のアメリカ人と会話する機会を得た。彼は博識であったが保守的で、アメリカは自らの身を守ればよく、他国に介入すべきでないと話したという。ニューオーリンズへ向かうバスでは、チェコスロバキア出身でアメリカ国籍を取得したという20代の男と知り合った。彼は、故国では共産主義政府が自由を奪ったため、現在は戦前よりも生活が困難になっていると語ったという〔Qalam 1953.12: 23-27〕。これらの体験は、アメリカが持つ多様性を物語っているといえよう。

全体として、これらのアメリカの記事は時事的な内容ではない。ただし、これらは当時の東南アジアとは全く異なる物質文化やライフスタイル、社会の様子を描いたものであり、冷戦下におけるアメリカのプロパガンダの一部であるともいえる。これを『カラム』が掲載したということは、彼ら自身も反米的ではなく、近代主義的な傾向を示しているといえるだろう。



資料3-12

おわりに

本論では、1953～56年を中心とした『カラム』誌の写真と関連する記事を通じて、同誌の世界観を明らかにすることを試みた。明らかになった点は以下のとおりである。

第一に、東南アジアのイスラム世界(マラヤ、インドネシア)の報道の比重が高まっている。ただし、『カラム』の政治的スタンスは両地域における主流派に対しては批判的な立場をとっていた。このため、報道においては主流派の代替となりうる野党勢力に幅広く目配りをしていた。

第二に、中東イスラム世界に関しては、石油に関する報道が増えている。これは、イスラムの中心として同地域が注目されているわけではないことを示している。同時代の中東が国際政治上の焦点となっていたため、石油を生産するイスラム国であるサウジアラビアやイランに注目が集まった。それらの国々が近代化し、欧米やソ連に伍していくことが期待された。

第三に、それ以外では、ソ連、中国といった共産圏、アメリカなどの大国に紙幅が割かれている。ソ連と中国は宗教に対する姿勢が批判の対象となり、自由の欠如が強調されているのに対して、アメリカに関する記事は、ややプロパガンダ色があり、物質的な豊かさ、自由、多様性に彩られていた。イスラム世界に対する報道姿

勢と合わせて、『カラム』が単なるイスラム主義というだけではなく近代主義的性格が反映されているといえよう。

筆者の前稿と比較してみると、創刊当初よりも『カラム』は政治色を強めている。アメリカの記事は異彩を放っているものの、女性の写真を多く掲載した華やかさは失われ、その分政治における権力争いの部分に焦点があてられている。この背景として、第一には冷戦構造が強固なものとなったこの時期の世界的な動向が指摘できる。さらに、東南アジアにおいては、マラヤ、インドネシアが民族主義的な国家建設に収れんし、『カラム』の政治的立ち位置が狭まってきた。これにより、同誌が多様な記事を掲載する余裕が失われてきているとみることもできる。1950年代中葉の『カラム』は、この時期にマレー・ムスリムが経験した大きな時代の動きを生々しく伝えているのである。

参考文献

- Talib Osman. 2002. Ahmad Lutfi: Penulis, Penerbit dan Pendakwah. Kuala Lumpur: Dewan Bahasa dan Pustaka.
- 坪井祐司 2010「コラム「祖国情勢」に関するノート」山本博之編『カラムの時代Ⅰ——マレー・イスラム世界の近代(CIAS Discussion Paper No.13)』京都大学地域研究情報統合センター、pp.10-17。
- 坪井祐司 2014「カラムが切り取った世界——写真が語る東南アジア・ムスリムの世界観」坪井祐司・山本博之編『『カラム』の時代Ⅴ：近代マレー・ムスリムの日常生活』(CIAS Discussion Paper No.40)』京都大学地域研究情報統合センター、pp.9-18。